【１日目　～８月３０日～】

「おはよう」

　最愛の男の声が背後からして。
　布団で眠っていた土方は、主人を心から慕う愛犬のような反射神経で跳ね起きた。
　心の中を、幸せな清々しい風がぶわっと吹き抜ける。
　本物の犬ならば、千切れるまで尾を振って忠誠を示したに違いない。
　天にも昇るような夢見心地で。
　振り返りながら、土方は満面の笑みを浮かべて言った。

「おはよう、銀時！　――…あっ！」

　口から飛び出した言葉が相手に届くよりも早く、土方の顔面は真っ青に凍りついた。
　心臓が、ヒュッと音を立てて縮み上がる。
　胸が痛い。
　黒色の瞳孔は驚愕のために最大値にまで広がり、ピキピキと悲鳴を上げながら罅割れた。
　そんな馬鹿な。
　自分は助け出されたはずなのだ。
　ここは万事屋のはずで……。
　自分の隣には銀時がいるはずで……。
　自分は確かに銀時の声を聞いたはずで……。

　――なのに。

「おはよう、土方君。随分と幸せな夢を見ていたようじゃのう」
「……あ、あぁ」

　カタカタと震えながら、土方は条件反射でぺたりと正座の姿勢をとった。
　もう、取り返しなどつくわけがないのに。
　この口から飛び出した言葉を封じ込めたくて、戦慄く掌で口を押さえた。

――そうだ。何を勘違いしたのだろう。

声の主は、自分の飼い主である魅戸四囹(みとよつくに)で。
ここは、魅戸の寝所である。
昨夜は遅くまで魅戸に股を開き、身体中を舐められて臭い唾液を塗り込められたのだった。

「……あ、あぅぅ」

言葉にならなかった。
今更手で塞いだところで遅い。地獄耳の魅戸が、恰好の仕置きの口実となる失言を聞き逃してくれるわけがない。
土方の傍らに寝そべっている全裸の魅戸は、老人特有のたるみを帯びた腹を揺すって笑った。

「はっはっは！　そうかそうか！　わしの愛撫は愛しの恋人と勘違いするほど良かったか！」

魅戸の瞳に、粘着質で嗜虐的な光が灯った瞬間。
土方は気が遠くなるような絶望を感じた。

なんで……。
なんで、銀時の名を口にしてしまったのだろう。
なんで、この男を銀時だなどと勘違いしてしまったのだろう。

最低だ、最低だ！

一晩中ねちねちと責め抜かれ、汗と涙と精液が染み込んで湿った高級布団に視線を落としながら、罪悪感に打ちのめされて土方はガタガタと戦慄いた。
魅戸は土方の顎を無遠慮に鷲掴み、力任せに上向かせた。

「…ヒィッ」

悲鳴にもならないか細い声が、真っ青な唇の隙間から毀れ落ちた。
死んだ毛虫を靴裏でぐりぐりと踏み躙るように。
肉体の全てを支配するだけでは飽き足らない魅戸は、土方の心の奥の大切な

場所に爪を立て、面白半分に血が滴るまで引っ掻くという遊びを日常的に繰り返して愉しんだ。

「ところで土方君、君の恋人の名はなんだったかのう。もう一度聞かせてくれんかね。――『ぎん』、なんとかと言ったなぁ。確か、かぶき町に住んどるんだったのう」
「…あ、あの、…あのそれは、…あの」

　答えられるはずがない。
　はくはくと、唇だけが開閉して空回る。
　もうすでに、最低な褒美と引き換えに、最愛の男の名は土方の口から暴露されている。
　それでも。
　大切な恋人の名を告げるよう陵辱者たちに改めて命じられる度、土方は凄まじい抵抗を感じて歯を食い縛るのだった。

（――…うぅ、嫌だ！　言うもんか！　言うもんか！　銀時の名をこれ以上汚すもんか！）

　土方のこめかみから、一滴の汗が流れ落ちた。
　骨の髄まで主人の恐ろしさを思い知っている土方は、主人の機嫌をこれ以上損ねぬよう、恋人の名を誤魔化すために何か言わねばと思ったが、脳味噌のどこをどう探してもふさわしい言葉など見つからなかった。

　――パシーン！

　恐怖で頭が真っ白になった土方の頬に、強烈な魅戸の平手が炸裂した。
「……うぅ」顔を吹き飛ばされた土方が低く呻いた。
「わしの命に逆らう気か？　言いたまえ、土方君。お前はもうわしの所有物だろうが！」
「……ヒィッ！！」
　魅戸は、土方の証と袋をきつくギュウッと鷲掴みにした。男の最も大事で最も脆弱な器官を質にとられても、無論、土方に払いのける権利などない。なすがまま耐えている土方の恥骨の上を、親指の腹でくるくると撫で回しながら、魅戸が嘲った。

「こんなところに、こんな焼印を押された身体で、恋人の元に戻れるとでも思っているのか！？　どの面下げて戻るつもりだ！？　ん！？」

本来、黒々とした毛で覆われていなくてはならない土方のそこは、赤子のようにつるつるでただの一本すら毛が生えていない。縮れ毛の代わりに土方の恥丘に張り付いているのは、魅戸家の家紋の焼印である。土方の白い肌に焼きついた焦げ茶色の葵の御紋を、魅戸は満足そうになぞっているのだ。
左頬に真っ赤な手形を貼り付けた土方は、股間を鷲掴みにされながら、いやいやをするように頭を振って藻掻いた。

（やめろ！　やめてくれ！　それ以上言わないでくれ！　こんなおぞましい焼印をつけられた身体で、銀時の元に戻れないことくらいわかっている！　合わす顔なんてない！　そんなの、俺が一番わかってる！　――だから、そんな酷いことを言わないでくれ！　聞きたくないんだよ！）

愛する銀時を意識すると同時に、二度と消えぬ性奴隷の烙印を意識させられることは、いつも土方の心を危うく追い詰めた。

ぼろり、ぼろぼろ……。

精神を支えている土台が、急速に腐って崩れ落ちる。
もう、懇願する気力も出てこない。
罅割れた瞳で、土方は無言のまま魅戸を見上げた。
「ほほぅ、いい度胸だ」
無言を反抗ととった全裸の魅戸が、舌なめずりをしながら立ち上がった。
魅戸の腰の中心では、自身の残酷な命令に興奮しきった一物が跳ね踊っている。

「扱け」
「……はい、ご主人様。喜んで努めさせて頂きます」

少しでも魅戸の機嫌を取ろうと。土方は主人の一物に手を伸ばし懸命に扱いた。尿道口からとぷとぷと湧き出す先走りの粘液を指に絡め、全体に満遍なく塗り広げた。青い血管がグロテスクに浮き上がる裏筋をしゃこしゃこと丹念に扱くと、たちまち、魅戸の肉棒は満足そうに踏ん反り返った。